

## 平安京左京八条四坊二町跡・塩小路若山城跡 現地説明会資料

調査期間：令和4年5月17日～ 7月16日（予定）  
調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課  
所在地：京都市下京区東塩小路町556番10  
遺跡：平安京左京八条四坊二町跡・塩小路若山城跡  
調査面積：約260㎡（約230 + 30㎡）

### 1 はじめに

今回の調査地は平安京左京八条四坊二町跡および中世土豪の邸宅跡と推測されている塩小路若山城跡に該当しています。

当該地周辺ではこれまでに発掘調査が多数行われており、その成果からこの周辺は平安時代末から鎌倉時代にかけて活発な土地利用があったことがわかっていました。これはこの時代、当該地から現在の京都駅一帯にかけての広範囲が八条院（※暲子内親王、鳥羽天皇の皇女）の所領であったことと関係があると考えられます。

中世末の16世紀初頭には、当該地周辺を若山氏が開墾したという記録が残っており、この後、この開墾をベースに東塩小路村が拓かれていきます。若山家は村の庄屋として存続し江戸時代を通じて記録を残しています（若山家文書）。塩小路若山城跡は、永正年間頃にできた若山氏の居城として推定された遺跡ですが、これまでに関係する遺構が見つかっておらず詳細な点は不明です。

#### 東塩小路村の境界と御土居

当該敷地の東隣接地には豊臣秀吉が洛中を囲うために作らせた御土居がありました。御土居の東辺は鴨川の洪水に対する堤防の機能ももっており、現在の高倉通よりも東側は平安時代や中世には河川敷のような景観を呈していたと考えられます。明治の地歴によれば東塩小路村は京都駅の北側エリア一帯に広がっており、西は西洞院通周辺までありました。村の南辺もまた御土居で囲われていることから、洛中にあった農村であると言えます。

### 2 見つかった主な遺構

今回の調査地で最も目を引く遺構は南北溝1です。幅約3m、深さ0.7～0.9mあり、底には水が流れていたことを示す砂や泥が堆積していました。2度の掘り直しが

認められ、最終的に埋められた時代は17世紀後半です。

平安京跡で一定の規模を持つ溝を確認した時に、発掘調査の担当者はまず平安京に関連する溝（条坊関連遺構・あるいは1町を細かくわった四行八門の溝）を想定して調査地の位置と条坊の関係を調べます。しかし当該地は左京八条四坊二町跡の北東部（図1）ですが条坊側溝の位置ではありません。四行八門の区画とも無関係であることがわかりました。では何のための溝でしょうか。幅3mもある溝なので掘削には多人数が必要です。そこから重要な溝とわかります。

溝の性格を考える上でヒントが3つありました。1つは埋められたのが17世紀後半であること。2つ目は溝の西側からは江戸時代の井戸などが複数見つかる一方で、東側には無いこと。3つ目は寛永頃の絵図から推測される屋敷地と藪の境界線と概ね一致することです（図4）。その他に16世紀初頭頃の井戸を壊してつくられていたこともわかりました。当該敷地の東には御土居があり、ここが豊臣期以降の「洛中」の東端であることを示しています。また明治時代の町割（図2）から当該地は東塩小路村の北東にあたります。平安京とは関係なく、平和になった江戸時代の前期後半には不要になり、江戸前期の境界に概ね一致することから東塩小路村東境界の溝であったと考えます。埋まった時期は17世紀後半、作られた時期の詳細は不明ですが、16世紀初頭に溝と重複する井戸が埋められていたことから若山氏がこの土地を開発した時期からあった可能性が出てきました。

### 3 東洞院通と調査地

SD01は北で西に2度振っています。京都の土地割は基本的に南北方向のため、何か理由があるはずですが、塩小路村を示した江戸時代前期の絵図にヒントがありま

した。調査地を含む区画の西端は東洞院通（東洞院大路）で画されていますが絵図に描かれた東洞院通とSD01は同じような方向を向いています（図5）。

東洞院大路は鳥羽へ続いており竹田街道とも呼ばれます。現在の京都駅周辺が平安時代末から鎌倉時代に栄えたのは鳥羽離宮との往復に便利な京内の土地であったからにほかなりません。今回の調査地は八条院領の東端でもあります。東洞院大路を軸にした開発と関係の深い土地と評価できます。

平安時代から鎌倉時代の遺構には柱穴・土坑・墓がありました。調査地の土地は鴨川由来の砂で出来ていますので部分的に礫を沢山含む土で整地されていた様子が確認できます。この時期の遺構は調査区の全面で確認できます。多数の柱穴が確認できることから活発な土地利用が伺えます。また中世墓が2基確認できました。七条通の周辺では東本願寺前古墓群という遺跡があり中世墓が多数確認されています。こういった様相は烏丸四条付近で見つかる下京の中心域に準じた様相と言えます。

### 4 京都の南東端

当該地の地層が砂礫で構成されていることから平安京遷都以前の時代には調査地もまた河川敷であったと考えられます。平安時代前期の遺物が出土するので平安京遷都とともに徐々に安定した土地になり、平安時代中期頃

には建物が建っていたと推測されます。そして八条一帯が栄えた平安時代末には東洞院大路に接した町として活発な土地利用がありました。ただし今回の調査地でも洪水由来の砂層があります。御土居の立地から推測されるように鴨川沿いの土地であり、御土居造成以前には洪水の影響を受けやすい土地であったという側面も確認出来ました。

御土居の内側を「洛中」とすると調査地を含む東塩小路村は洛中と言えます。今回の調査は、京都の東辺部の盛衰の一端が垣間見えたことに面白さがあると言えます。

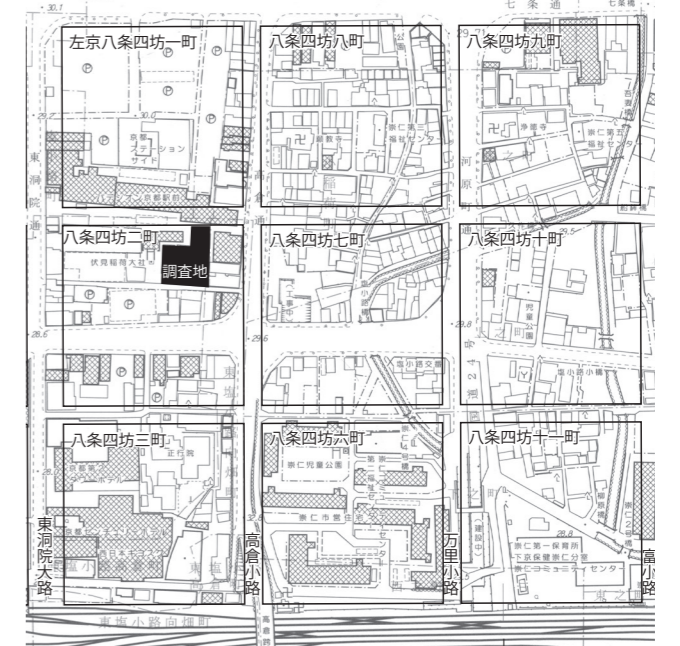


図1 平安京の条坊と調査地

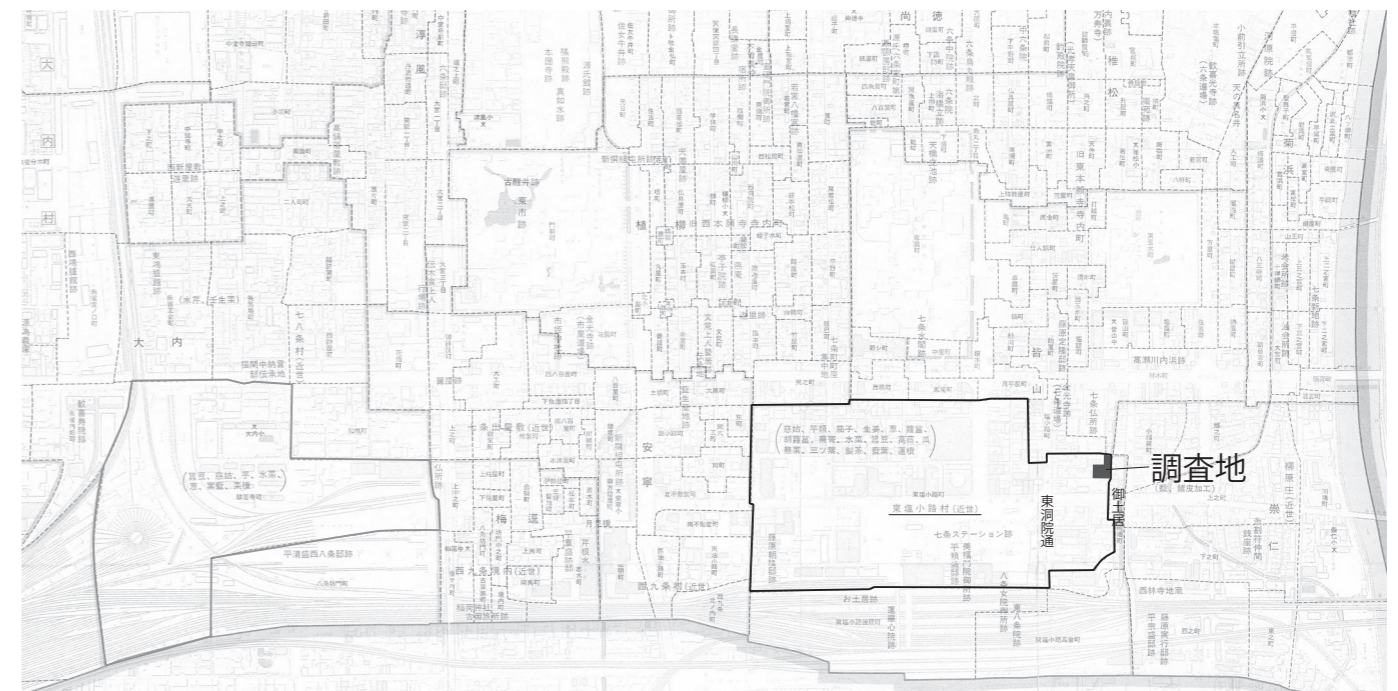


図2 調査地位置図

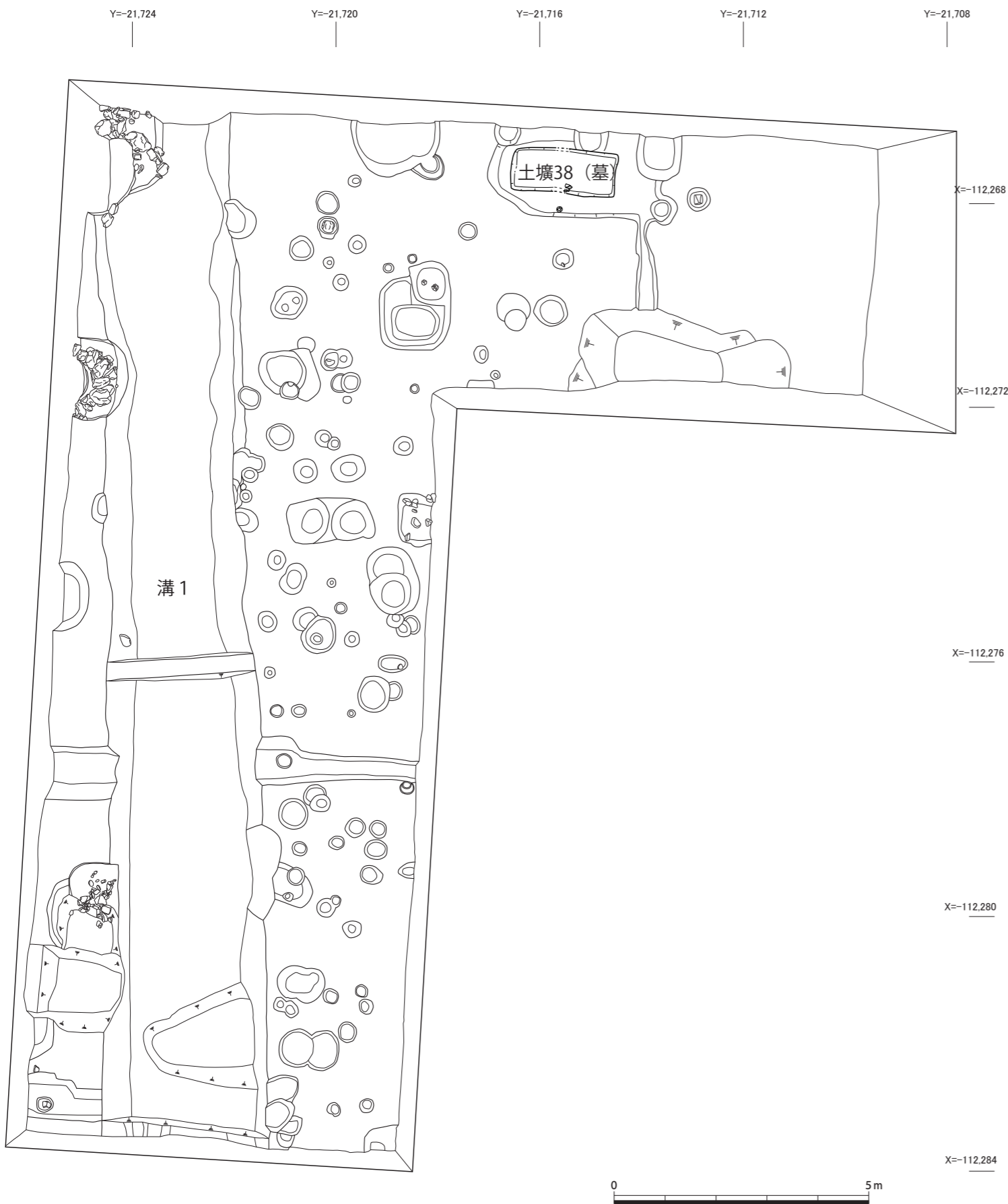


図3 第一面平面図 (1:100)

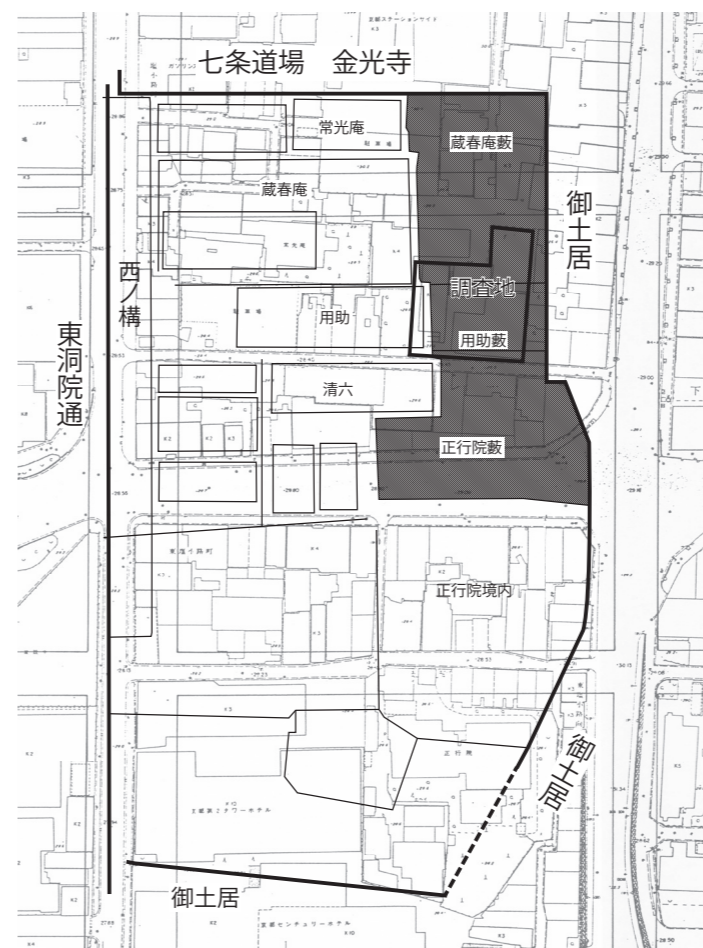


図4 調査地と江戸初期の敷地割

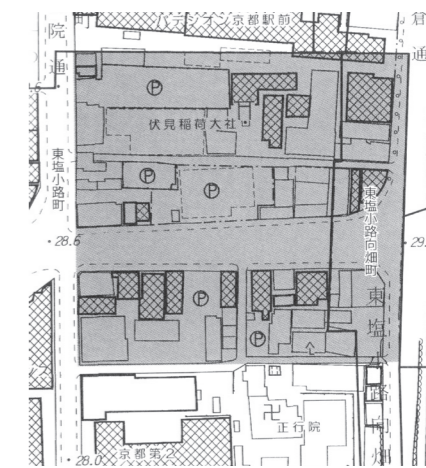


図5 塩小路若山城跡の推定範囲

(京都府教育委員会『中世城館調査報告書』第3冊 山城編1より転載)

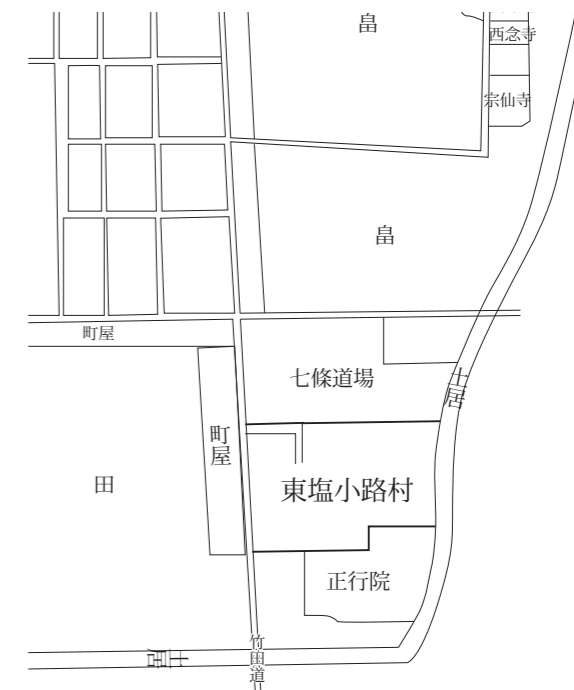


図6 寛永後萬治前洛中絵図より東塩小路村部分をトレース

(所蔵：京都大学附属図書館)



図7 今回の調査地出土の溝と西側の調査成果 (2018年調査)